様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４７４９

研究課題名（和文）モラルスキルトレーニングのプログラム開発と理論構築

研究課題名（英文）A program development of moral skills training and its theory building

研究代表者
林　泰成（Hayashi, Yasunari）

上越教育大学・その他部局等・教授

研究者番号：８０２９３２６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、道徳的行為に関する体験的な学習プログラムの一つとしてのモラルスキルトレーニングを用いた道徳教育プログラムの効果を実践的に明らかにし、その理論構築を行うことである。そのために、小学校および中学校の道徳科授業において、モラルスキルトレーニングを中核とした教育プログラムを実施し、道徳性検査による量的研究とテキストマイニングや参与観察による質的研究を行い、その効果を明らかにした。理論構築については、今後公表する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　道徳の時間は、小学校においては平成３０年度から、中学校においては平成３１（令和元）年度から「特別の教科　道徳」となった。この教科化は、いじめ防止に効果的だとみなされての取組である。したがって、これまでとは異なり、具体的な行為につながる指導法が求められている。そうした社会状況を背景として、本研究は、新しい道徳科の授業方法の一つとしてのモラルスキルトレーニングの効果を検証し、その理論構築を目指すものである。
　従来の道徳教育が、心情面での指導を中心としてきたのに対し、具体的な道徳的行為に焦点化して道徳性を高めるという点でこの方法は画期的なものであり、その実証的な研究には大きな社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research is to clarify the effect of the moral education program using the moral skills training as one of the experiential learning programs about moral action, and to build its theory. For that purpose, we conducted a moral skills training program in elementary and junior high schools, and conducted a quantitative study based on morality tests and a qualitative study based on text-mining and observation to clarify the effect. The theory construction will be announced later.

研究分野：教科教育学

キーワード：モラルスキル　スキルトレーニング　道徳　道徳教育　行為　体験　特別の教科

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）「道徳の時間」は、小学校においては平成３０年度から、中学校においては平成３１（令和元）年度から「特別の教科 道徳」として教科化することが確定された。そして、その道徳科の授業方法の一つとして小学校および中学校の学習指導要領では、「道徳的行為に関する体験的な学習」が求められている。これは、従来の道徳授業では、心情面を中心に指導が行われ、具体的な行為の指導にはつながりにくかったことが問題視された結果、従来からの方法に加え、新たに提案されたものと思われる。とりわけ、道徳教科化の議論がいじめに対する防止から始まったことを考慮すれば、具体的に行為の指導につながる指導法が求められるのは当然のことと考えられる。

（２）上記のことに関する国の政策と並行して、研究代表者は、これまで、具体的な行為の仕方から道徳性の育成へとつなぐ道徳教育プログラムであるモラルスキルトレーニングを提案してきた。その考え方や実践は、林泰成編『小学校道徳授業で仲間づくり・クラスづくり モラルスキルトレーニングプログラム』（明治図書、2008 年）や林泰成著『モラルスキルトレーニングスタートブック』（明治図書，2013 年）として公刊されており、学校現場にも広がりつつあるが、しかし、実証的な研究と理論構築はまだ十分なものではない。

（３）そこで、本研究では、国の政策にも合致する道徳的行為に関する学習プログラムの一つとして、モラルスキルトレーニングプログラムの実践研究を進め、実証的な検証をしたうえで、その理論構築を行う必要があると考えた。

２．研究の目的

（１）小中学校における道徳の時間は、「特別の教科 道徳」として教科化することが確定された。その道徳科の授業方法の一つとして小学校および中学校の学習指導要領では、「道徳的行為に関する体験的な学習」が求められている。そのことを踏まえて、本研究では、道徳的行為に関する学習プログラムの一つとして、モラルスキルトレーニングを用いた道徳教育プログラムを開発し、その理論構築を行う。

（２）より具体的には、モラルスキルトレーニングを導入した道徳科授業の効果を、道徳性発達検査等を用いて量的に検証し、さらに、テキストマイニングや参与観察を通して質的な特質を明らかにし、それらに基づいて理論構築を行うことを目的とする。

３．研究の方法

（１）モラルスキルトレーニングを用いた道徳科授業の効果を、HEART 道徳性診断（東京心理）に用いて量的に検証する。モラルスキルトレーニングを用いた道徳科授業の効果を、テキストマイニングおよび参与観察をとおして、質的にその特質を明らかにする。

（２）上記のことを行うために、4 時間の授業プログラムを作成し、実施し、その前後で、HEART 道徳性診断（東京心理）を行って子どもたちの道徳性の変化を確認する。また同時に、参与観察をとおして、子どもたちの変化の様子を見る。1 時間の授業プログラムは、大きく 4 段階に区分される。イントロダクションでは、問題場面の提示とそれを理解するための二人一組でのペアインタビューを行う。ロールプレイ１では、登場人物と場面状況の理解ために、再現のロールプレイを行う。ロールプレイ２では、子どもたち自身が創造的主体的に問題解決に取り組めるように、解決のロールプレイを演じる。最後のリフレクションの段階では、この授業での学びを振り返り、具体的な行為の仕方とそれに伴う心の動きや道徳的な内容を確認する。
　以上のようなプログラムの実施を、複数の学校で行う。

（３）上記の結果などをもとに、モラルスキルトレーニングおよびそれを用いた道徳科授業の理論を構築する。たとえば、日本でも実施されているコールバーグの発案によるモラルジレンマ授業は、彼の説く道徳性発達段階論に基づいて考案され、その効果が説明される。しかし、そこでは、道徳的判断とその理由付けに焦点化されており、具体的な行為との関係についての説明が乏しい。モラルスキルトレーニングでは、道徳的行為が問題とされるのでそこまで含めての理論構築が必要とされる。

４．研究成果

（１）小学校および中学校の「特別の教科 道徳」において、研究協力者によってモラルスキルトレーニングのプログラムを実施した。HEART 道徳性診断（東京心理）の量的なデータでは、変化は出にくいが、テキストマイニングやエピソード評価から得られる質的な様相では変化が見られることが明らかになった。概括的に述べれば、行為の指導から入るモラルス

キルトレーニングによる道徳教育は道徳的な行為へとつながりやすいといえる。

（２）研究を進める中で、私たちの取組に意味があったかどうかを検証する評価（研究に対する評価）とは別に、子どもたちの道徳性をさらに高めるような評価方法の必要性が問題となった。つまり、評価を子どもたちにフィードバックしてそれが同時に道徳性を高めるよう指導につながる評価（指導と一体化した評価）の在り方が問題となった。道徳科授業は知識伝達を中心とした教科とは異なるということや、指導要録においても他教科とは違って観点別評価にはしないということなどから、グラント・ウィギンズ（Grant　R.Wiggins：1950-）らのオーセンティック・アセスメントの考え方にその解決を求めた。とりわけ、私たちは、授業や日常生活の中で子どもたちのエピソードを集めそれを当人にフィードバックすることを試み、その効果についても肯定的な感触を得た。しかし一方で、道徳的行為に関するエピソードは、教師が驚かされるような、子どもたち向社会的な行為こそが、もっとも道徳的に適切なエピソードになるということもあって、前もってルーブリックを定めることは難しいなどの課題も明らかになった。

（３）本研究の当初の目的では、モラルスキルトレーニングの理論構築を行うことまで想定している。この試みは、これまである研究者の視点からのみとらえられていた道徳性（たとえば、ある社会学者によれば、それは社会的事実であるし、ある心理学者によれば認知的能力であるし、別な心理学者は、非認知的能力が先行して善悪を判断しているととらえるなど）を包括的に定義し直すことを必要とするし、また、モラルスキルトレーニングは行為を取り上げるがために、道徳性を内面的なものとしてだけでなく、行為や行動へと拡張する必要があることから、難しい作業になる。しかし、そうした包括的なとらえ方は、たとえば、ジョナサン・ハイト著『社会はなぜ左と右にわかれるのか――対立を超えるための道徳心理学』（紀伊国屋書店、2014 年）にみることができる。こうしたハイトらの知見とこれまでの研究成果を踏まえて試みているその理論構築についての論考は、現在、学内紀要にエントリー中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 渡邉真魚、林泰成	４．巻 第７巻
２．論文標題 エピソード評価を用いた個と集団の関係性の修復についての実践的研究：学級における対人関係の問題解決	５．発行年 2020年
３．雑誌名 上越教育大学教職大学院研究紀要	６．最初と最後の頁 155-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 林泰成，渡邉真魚	４．巻 第36巻第2号
２．論文標題 道徳科の評価方法としてのエピソード評価	５．発行年 2017年
３．雑誌名 上越教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 379-388
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Mao Watanabe, Yasunari Hayashi
２．発表標題 Moral Skills Training in Japan: Fostering Morality by Teaching Moral Acts
３．学会等名 The Asia-Pacific Network for Moral Education（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasunari Hayashi
２．発表標題 Moral skills training in Japan: in relation to a whole school approach to moral education
３．学会等名 The Asia-Pacific Network for Moral Education（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	渡邉　真魚 (Watanabe Mao)		